

# 目次

57	巻頭言	伊谷 原一
58	連載「ぼくはこうしてゴリラになった」第8回	対話を重んじる伝統・・・山極 壽一
60	連載「氷河から熱帯雨林まで」第7回	東京の空に舞うインコの大群・・・幸島 司郎
62	連載「生態学者が往く」第4回	マレーシア・キナバタンガンの旅・・・湯本 貴和
64	連載「自然と芸術」第8回	隠岐の自然と芸術・・・齋藤 亜矢
66	連載「大型類人猿探訪」第11回	チンパンジーのいる暮らし・・・林 美里
68	連載「サルに住む森」第11回	食べる葉、食べない葉・・・松田 一希
70	連載「ウマ学ことはじめ」第11回	オスがあやつる群れの性質・・・リングホーファー 萌奈美
72	連載「海外生息地調査」第11回	ダナムバレイの森でオランウータンを追う・・・金森 朝子
74	連載「環境教育実践」第11回	笹ヶ峰実習に参加して・・・赤見 理恵
76	連載「霊長類学70周年」第4回	餌付け、人付け、サル付け～サル学における調査法の用語の起源～・・・伊沢 紘生
78	連載「動物園・水族館だより」第2回	野生のツシマヤマネコを訪ねる～動物園と域外保全～・・・山梨 裕美
80	ふるさとに帰るウマたちの話	小長谷 有紀
82	「塗魂ペインターズ」のボランティア塗装	今井 由香
84	ご寄附のお願い・イベントのご案内	

## ■表紙の言葉

たきびにあたるサルである。犬山の冬の風物詩になっている。日本モンキーセンターのニホンザルの群れは、屋久島から来たものだ。1956年に59頭が連れてこられ、今は8世代目までの166頭がいる。1959年に伊勢湾台風が来たときにたくさんの廃材が出た。それを飼育員さんたちが燃やして暖をとっていると、サルたちが自然に集まってきたそうだ。たきびでイモを焼くと、その焼きイモも食べるようになった。今はモンキーバレイと呼ぶ地区で展示しているのでぜひご覧いただきたい。熱いイモを、たきびのそばの池まで持って行って水につけて冷やす者もいる。火にあたるようになった、イモを水につけるようになった。それが親から子へと受け継がれる。犬山でしか見られないサルの文化だといえる。(撮影：高野智)



**松沢 哲郎 まつざわ てつろう**  
京都大学高等研究院・特別教授。霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院のコーディネーター。公益財団法人日本モンキーセンター・所長。中部大学創発学術院・特別招聘教授。京都造形芸術大学文明哲学研究所・所長。

# 巻頭言

## 伊谷 原一（京都大学野生動物研究センター）

京都大学野生動物研究センター (WRC) が発足して10年という節目を迎えた。2008年、センター発足と同時に私は初代センター長という大役を仰せつかったのだが、その船出は決して楽なものではなかった。研究室は日本学生支援機構ビル3階の宿泊施設に間借りし、フロアの中央には使用できない巨大な共同洗面台が鎮座していた。水道水は飲用禁止、トイレも使用禁止、設備も最低限のものしかなかった。なによりも運営資金が乏しかった。

それでも2年目には大学院生を迎え入れた。彼らの研究室や実験室を確保するために学内を奔走した。3年目には文部科学省から共同利用・共同研究拠点として認定され、各教員が外部資金獲得に奮闘して経済的に少し安定した。いまではビルの地階、1階、3階を占有し、設備も充実してきた。

一方で、国内の動物園・水族館との連携を重要なミッションに掲げた。まずは京都市動物園と名古屋市東山動植物園との連携協定を実現したが、最初の説明会では職場を乗っ取られると思ったのか、動物園職員からまるで黒船来航のような目で見つめられた。

それでもていねいに説明し、連携会議、ワークショップ、動物情報の提供、飼育施設の指導などをかさね、少しずつ理解してもらえるようになった。京大教員を京都市動物園に毎日送り込み、認知実験の過程を展示に活かしたり、東山動物園のチンパンジー施設の改修に積極的に取り組んだりしたことも功を奏したのだろう。

現在、連携する動物園は11園、水族館は8館に

まで増えて、動物園・水族館での教育研究を活発におこなっている。動物園大学や水族館大学というシンポジウムも回を重ねて定着しつつある。

連携園の中で、私が動物園長を兼任する日本モンキーセンター (JMC) の存在は貴重である。京都大学霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院から大きな支援を受けており、そのプログラム実践の場として博物館・動物園実習をおこなっている。飼育実習、展示ガイド、標本解説、動物麻醉、解剖、教育普及活動、来園者対応などは大学の座学では学べない内容である。

また、生息地研修も重要な活動だ。JMC や他の動物園スタッフが WRC の関わる幸島、屋久島、笹ヶ峰などの国内施設や、タンザニア、ボルネオ、ブラジルなどの海外フィールドに出かけてゆき、野生動物の観察や生息環境を実感する。その体験を日本に持ち帰り展示や教育普及活動に活かす。まさに「動物園は自然への窓」を実践している。WRC と JMC の連携を進めることで、双方のさらなる発展につながることを期待したい。



**伊谷 原一**  
いだに げんいち

京都大学野生動物研究センター・教授(初代センター長)。公益財団法人日本モンキーセンター・附属動物園長。霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院の副コーディネーター。林原類人猿研究センターの設立者。京都大学熊本サンクチュアリの初代所長。野生ボノボや野生チンパンジーの生態を通じて、人間社会の起源についての研究を進めている。